

喜びも悲しみも民とともにして……

九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

(一) 屋上よりハレー彗星をみて（昭和六十一年）

晴れわたる曉空に彗星は尾をひきながらあをじろく光る

曉の空にかぐやく土星の輪を見しよるこびは忘れざるべし

伊豆の海あまたかがやくいさり火に海人らのさちをこひねがふなり

（参考）

御製星（昭和四十四年）

なりひびく雷雨のやみて彗星のかがやきたりき春の夜空に

御製米子市にて（昭和六十年）

あまたなるいか釣り舟の漁火は夜のうなばらにかがやきて見ゆ

(二) 戦前の御製から

旭光照波（大正十一年）

世の中もかくあらまほしおだやかに朝日にほへるおほうみのはら

朝海（昭和八年）

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

海上雲遠（昭和十一年）

紀の国のしほのみさきにたちよりに沖にたなびく雲をみるかな

（参考） 海上雲遠

侍従長 鈴木貫太郎

あさづく日今のぼるらし見るがうちにほひくははる沖のしらくも

迎年祈世（昭和十五年）

西ひがしむつみかはして栄ゆかむ世をこそ祈れとしのはじめに

(三) 終戦時の御製（昭和二十年）

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならむとも

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

国がらをただ守らんといはら道すすみゆくともいくさとめけり

（参考） 「終戦の詔書」の一節

朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ 忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ 常ニ爾臣民ト共ニアリ

(四) 戦後の御製から

(イ) 民草とともに

戦災地視察（昭和二十年）

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
はるのやま（昭和二十三年）

うらうらとかすむ春べになりぬれど山には雪ののこりて寒し
福岡県和白村青松園にて（昭和二十四年）
よるべなき幼子どもうれしげに遊ぶ声聞ゆ松の木のままに

（参考） 皇后陛下御歌 福祉事業（昭和三十一年）
母とよび我によりくる幼な子のさちをいのりてかしらなでやる
引揚者に対して（昭和二十四年）

外国につらさしのびて帰りこし人を迎へむまごころをもて
国民とともに心をいためつつ帰りこぬ人をただ待ちに待つ
未帰還者をおもふ（昭和二十四年）

外国にながくのこりてかへりこぬ人をおもひてうれひは深し
大阪市立弘済院（昭和三十一年）
世のなかをさびしく送る老人にたのしくあれとわれいのりけり

（参考） 皇后陛下御歌 箱根養老院（昭和二十九年）
迎へまつる人のあはれささち薄き老のまなこに涙たたへて
皇后陛下御歌 幸（昭和四十四年）

めぐまれぬあまたの人もすくはましわが身に受けし幸をわかれて

(四) 西ひがしむつみかはして

エチオピア皇帝を迎へて（昭和三十一年）

外国の君をむかへて空港にむつみかはしつ手をばにぎりて

比国のガルシア大統領および夫人を迎へて（昭和三十三年）

外国のをさをむかへついさかひを水にながして語らはむとて
戦のいたでをうけし外国のをさをむかふるゆふぐれさむし
喜びて外国のをさかへるをば送るあしたは日もうららなり

米国大統領の初の訪日（昭和四十九年）

大統領は冬晴のあしたに立ちましぬむつみかはせしいく日を経て

(五) 七十歳になりて（昭和四十五年）

七十の祝をうけてかへりみればたゞおもはゆく思ほゆるのみ
ななそちを迎へたりけるこの朝も祈るはたゞに國のたひらぎ

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそち
ななそちになりにしけふなほ忘れえぬいそとせ前のとつ國のたび
（参考） 皇后陛下御歌 折にふれて（昭和四十四年）

つぎつぎにおこる禍ごといかにして慰めまつらむ言の葉もなし
みこころを悩ますことのみ多くしてわが言の葉もつきはてにけり
孝明天皇御製 述懐（元治元年）

さまざまになきみわらひみかたりあふも國を思ひつ民おもふため

マッカーサー元帥への直訴状

閣下、御きげんは如何でいらっしゃいますか。私共は、最高司令官でおいでになる閣下に対して、一番お親しみを感じ、それと共に閣下のあたたかいお心をおたより致します。閣下のお心一つをおたよりに思ひ乍ら、又方かへしてこの手紙を差上げる次第でございます。御面倒ともくどいともお思ひになるでせうが、どうぞ御辛抱下さいまして、日本国民の御願ひをおきき下さいませ。

今日の新聞は又私共を暗い心におとしめてしまひました。同胞が次から次へ戦犯者として捕はれることも無論私共の心を痛ましめますが、それはそれとして、天皇に御責任があられるや？といった感じを新聞からうけまして、限らない心痛に苦しめられて居ります。敗戦国の民として私共はどのような惨苦も甘受するものでございます。卑怯ものであつてはならない、といふ事が私共日本人の唯一のはこりでございます。どんな苦悩もグチ一つ云わずに忍ぶだけの心をもって居りますが、日本人の唯一つ忍びがたいものは、天皇に関する御不幸であります。それはどんなに小さな御不幸でも私共は忍ぶ事が出来ません。

今上天皇は御歴代の天皇の中で一番お苦悩の多い御不幸な天皇でおいで遊されます。それを思ふといつも涙が流れてまゐります。その天皇にこの上御苦勞をおかけ申上げることの苦しさは、天皇をお持ちにならない閣下には御理解下さるまいとは存じますが、この気持は決して無知なるものの盲信狂信ではございません。私共にとつて、決して天皇は偶像としての神ではいらつしやしません。私共が天皇を仰慕する心は、もともと熱い、もともと広いゆたかなものだと思つてをります。昨日も申上げましたとおり、それは日本人の血の中を脈うって流れてゐるものでございます。

今上天皇は、只の一人もいい御家来をお持ちにならなかつたことを申上げたたく存じます。天皇と国民との結合をへだてたものを私共はどんなに憎く思つてをりますことか、その上、自分達の責任をのがれて上御一人に責任を転かしようとする卑怯ものが容ぎ者中に只の一人でも居りますことを、私共は、日本国の最大不祥事と思ひ、又、そうした国民を閣下否世界中に発表されることの恥しさを身魂にてっして思ふものでございます。

日本の天皇は平和を愛し給ふのが御本質でおいで遊されます。御自身に代へて救ひたいと思召された国民が、そのお慈悲に御報ひすることを忘れた、現在の日本国民の一部の姿を世界に対して心から恥じてをります。

今上天皇に御責任は、ございません。天皇をお助け申すべき側近の臣等が天皇を窮地におとし入れ参らせたのでございます。閣下のおめに映ずる日本国民のみにくさをもつて、日本人全体を御評価なさらないで下さい。併し、私共も我々臣民はもともと優秀なものだと信じてをりましたので、見るものきくもの只々、恥と悲しみを味つてをります。

娼婦同様の媚態を示す若い娘達、餓える同胞をよそめにして闇で太つてゐる人々、日本に生れ乍ら天皇を排しようとする主義者、自分の責任を逃れようとする君側の臣等、等々、敗戦は敗戦として何故もつといさぎよくせめて持つことを許された祖先よりうけついでほこりをもつてゐてくれないのか、と只々それを口惜しく恥しく思ひます。

天皇をお守りするために、天皇の御安泰を保証される代りならば、ほんとうに私共の生命をふろこんでよるこんで閣下のお国へさし上げます。

閣下にお願ひいたします。

どうぞ日本天皇を御理解下さいまし。

拙劣な上に長文となりお許し下さいまし。きのふも今日もあたたかい日でございます。

私共はこんな日を霜日和と申してをります。

私共の生命のあらん限り愛し奉る、仰慕し奉る天皇、日本、そうして美しいむさしの。

閣下の御健康をお祈り申上げます。

十二月七日

伊藤たか(血判)

外に別段意見の発言がなければ私の考えを述べる。
反対論の意見はそれぞれよく聞いたが、私の考えはこの前申したことに変りはない。私は世界の現状と国内の事情とを十分検討した結果、これ以上戦争を続けることは無理だと考える。

国体問題についていろいろ疑義があるとのことであるが、私はこの回答文の文意を通じて、先方は相当好意を持っているものと解釈する。先方の態度に一抹の不安があるというのも一応はもつともだが、私はそう疑いたくない。要は我が国民全体の信念と覚悟の問題であると思うから、この際先方の申入れを受諾してよろしいと考える、どうか皆もそう考えて貰いたい。

さらに陸海軍の將兵にとつて武装の解除なり保障占領というようなことはまことに堪え難いことで、その心持は私にはよくわかる。しかし自分はいかにならうとも、万民の生命を助けたい。この上戦争を続けては結局我が邦がまったく焦土となり、万民にこれ以上苦惱を嘗めさせることは私としてじつに忍び難い。祖宗の靈にお応えできない。和平の手段によるとしても、素より先方の遣り方に全幅の信頼を置き難いのは当然であるが、日本がまったく無くなるという結果にくらべて、少しでも種子が残ればさえすればさらにまた復興という光明も考えられる。

私は明治大帝が涙をのんで思いさられたる三国干渉当時の御苦衷をしのび、この際耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、一致協力将来の回復に立ち直りたいと思う。今日まで戦場に在つて陣歿し、或は殉職して非命に斃れた者、またその遺族を思うときは悲嘆に堪えぬ次第である。また戦傷を負い戦災をこうむり、家業を失いたる者の生活に至りては私の深く心配する所である。この際私としてなすべきことがあれば何でもいとわれない。国民に呼びかけることがよければ私はいつでもマイクの前にも立つ。一般国民には今まで何も知らせずにいたのであるから、突然この決定を聞く場合動揺も甚しからう。陸海軍將兵にはさらに動揺も大きいであろう。この氣持をなだめることは相当困難なことであるが、どうか私の心持をよく理解して陸海軍大臣とともに努力し、よく治まるようにして貰いたい。必要ならば自分が親しく説き論してもかまわない。この際詔書を出す必要もあるから、政府はさっそくその起案をしてもらいたい。

以上は私の考えである。

御説を承っているうちに頭は次第に下つておもてを上げる者もない。忍び泣く声がここにかしこに聞えてくる。御ことばのふしぶしに胸を打たれる。たとえ我が一身はいかにあろうとも、国は焦土と化し、国民を戦火に失い、何として祖宗の靈にこたえんやという御心を拝して、涕泣の聲は次第に高まつてくる。さらに為すべきことはいとわれない、マイクの前に立つてもよいと仰せらるるに至り、忍び声を止めもあえず声をあげた。ここにもそこにもせき上げしやくりあげる声が次第に高くなる。陛下の白い手袋の指はしばしば眼鏡を拭われ、ほおをなでられたが、私たちはとても正視するに堪えない、涙に眼鏡もくもってしまった。御説が終りて満室ただすすり泣く声ばかりである、しやくり上げる声ばかりである。やおら総理は立ち上つた。至急詔勅案奉仕の旨を拝承し、くり返して聖断を煩わしたる罪を謝しうやうやくり引き下つた。陛下は席をたれた、一同は涙の中にお見送りした。泣きじやくり泣きじやくり一人一人椅子を離れた。長い長い地下壕をすぐる間も、車中の人となつても、首相官邸へ引き上げても、たまりの間に閣議の席にも、思い出してはしやくり上げ、涙は止め処もなく流れる。記者団を前にしても私はせき上ぐる涙をとどめもあえず、問う者も答える者もついに声をのんで不覚の涙にくれたのであった。

私のメモには「その夜もあくる日もあくる夜も、そのまたあくる日も夜も、思い出してはむせび思い出しては泣き、當時をしのびて胸迫り筆は進まなくなった。今宵はここに筆をとめる」と記してある。

建国二千六百年やぶれたためし知らざる国敗れたり

民草をあはれみたまふ大御心おもひあげまつり涙せきあへず

今さらに何といらへんすべもなし面を伏してただ涙する

聞くがうちにまさ見にたす頭下りすすり泣く声そここに聞ゆ